

研究論文

大学と卒業生との関係構築における学生同窓会の意義 —日本と米国の学生同窓会を比較して—

原 裕美

(神戸大学大学院国際協力研究科)

米国の大学には学生によって構成され、大学と学生・卒業生・同窓会を繋ぐ様々な活動を行っている「学生同窓会 (Student Alumni Association)」が多数存在する。一方、日本において学生同窓会がある大学は2大学のみである。本稿の目的は、日本と米国の学生同窓会の論理構造を比較検討することによって、大学と卒業生との関係構築における学生同窓会の意義を明らかにする。本稿では立命館アジア太平洋大学校友会学生実行委員会と米国の学生同窓会の論理構造の比較を通してその意義を明らかにする。本稿から日本に得られた示唆は、大学が実現すべきことを明確にし、大学と学生同窓会とのコミュニケーションを通じてそれらを学生や卒業生に伝えることである。また米国の学生同窓会は、大学スポーツやコミュニティサービスといった大学の諸活動と有機的な連携を確立していることも明らかになった。大学や同窓会の後継者たるリーダーを育てるシステムとして学生同窓会のような仕組みが日本にも求められる。

キーワード: 学生同窓会、卒業生、大学コミュニティ、ネットワーク形成、リーダーシップ開発

1. はじめに

1.1. 学生同窓会とは

本稿の目的は、大学と卒業生との関係構築における日本と米国の学生同窓会の論理構造を比較検討することによって、学生同窓会の意義を明らかにすることである。

近年、諸外国の大学と卒業生との関係構築の動きが活発化している。従来まで大学と卒業生との関係に関する研究は、1913年に設立された同窓会関係や資金調達の専門家によって構成される教育発展支援協議会 (Council for Advancement and Support of Education、以下「CASE」) という団体を中心に、米国で蓄積されてきた。しかし2010年以降、韓国・中国・タイ・アイルランド・南アフリカ共和国・ナイジェリアなど各国の大学と卒業生との関係性を論じる研究が次々と発表されている (Sung & Yang, 2009; Zhimin, Chunlian, & Xian, 2016; Shakil & Faizi, 2012; Rattanamethawong, Sinthupinyo, & Chandrachai, 2018; Gallo, 2012, 2013; Ebert, Axelsson, & Harbor, 2015; Rust, 2012)。これらの研究で共通している問いは「大学は卒業生とどのように関係を構築するか」であり、その答えの一つとして「学生時代の経験と満足度」の重要性が、校友行政の分野の先行研究で明らかにされている。学生時代における大学の諸活動への参加や卒業生をはじめとする様々な人との交流が、学生の経験を豊かにするという研究結果を実践と結びつける仕組みの一つとして、米国の

大学には学生同窓会 (Student Alumni Association) という学生団体が存在する。米国で最初の学生同窓会とされるインディアナ大学学生同窓会を例に見てみれば、学生同窓会とは「同窓会との関係を促進するプログラムを提供することにより、学生と同窓会との関係を確立すること」を目指している。そうした目的のもと、「プログラムやネットワーキングやイベントを通して、学生と卒業生の関係を促進」する学生団体である (Indiana University Student Alumni Association, n.d.)。筆者の調べによれば、こうした学生同窓会は、多くの米国の大学で展開されており、他にはカナダ・オーストラリアのシドニー大学にその存在が確認できる。

日本の大学における学生同窓会は、立命館アジア太平洋大学校友会 (以下「APU 校友会」) の学生同窓会組織「Loop. A. S. (校友会学生実行委員会)」と明治大学学生校友会のみである。40年以上の長い歴史をもつ米国の学生同窓会と比較すれば、日本の学生同窓会は萌芽段階にある。そこで本稿では、そうした萌芽段階にある日本の学生同窓会の方向性に一つの手がかりを得るため、日本と米国の学生同窓会の論理構造を比較し、いかなる共通性や差異性を持つのかを分析し、学生同窓会の意義を明らかにしたい。

大学と卒業生との関係構築が国際的な共通課題となっている中で、大学と卒業生との関係構築を支える学生同窓会の論理構造や意義を検討することは、日本だけではなく、

各国の大学と卒業生との関係構築における学生の関与を機能的に促進する仕組みをどのように構築していくかといった点に新しい知見を提供することができるだろう。

1.2. 学生同窓会の歴史

まずは、学生同窓会の歴史から紐解いていこう。米国で最初の学生同窓会は1949年にインディアナ大学で設立された（Button, 2010: 123）。その後、1974年アイオワ州立大学にて、全米の学生同窓会並びに学生財団（Student Foundation）が集まり第1回全国大会が行われた。1983年には、「67の高等教育機関の300名の学生がミネソタ大学に集まり、学生同窓会のネットワークを設立」したため、学生同窓会は学生と卒業生、大学を繋ぐ学生団体として全米に広がった（Button, 2010: 124）。1992年、この全米の学生同窓会ネットワークをCASEが取りまとめ、CASE加盟機関の学生発展プログラム（CASE Affiliated Student Advancement Programs）として、300以上のCASE加盟機関の学生同窓会と学生財団のネットワークとして確立した。このネットワークの目標は、同窓会から資金調達、マーケティングといったあらゆる分野での学生の関与を促進し、強化することである。学生発展プログラムでは、毎年、学生同窓会に関連するカンファレンスや研修を開催し、優れた取り組みを行った学生同窓会を表彰している。

学生同窓会は、活動を通じて学生が得られることができるであろう能力や機会を明確に示している。学生同窓会に加入することによって「リーダーシップ、チームワーク、コミュニケーション、パブリックスピーキングの経験」「卒業生とのキャリアネットワーク」を得ることができるとされる。その他には「学生同窓会メンバー限定のイベント（卒業生との会食等）」「Tシャツ・バッグなど大学のグッズプレゼント」「地域や学内の店のディスカウント」「同窓会奨学金への申込資格」などの利益を得ることができる（原, 2017）。

1.3. 先行研究の整理と問題の設定

(1) 学生同窓会に関する先行研究と実態

冒頭で述べたように大学と卒業生との関係構築において、学生時代に大学の活動や卒業生と関わる経験の重要性が繰り返し主張されたことやAstin（1999）やTinto（1975）の学生関与の理論が米国で広く受け入れられたため、多くの米国の大学は学生同窓会を設立し、学生と卒業生との繋がりを組織的に展開した。Kuk, Thomas & Banning（2008: 16）によれば、学生の大学における様々な関与はその大学での経験を肯定的に評価する要因にもなると指摘し、学生団体は「教育機関の目標に対する学生団体の関与を強化し、学生の成功を発展」させる役割を担ってい

ると主張する。

こうした学生団体の一つでもある学生同窓会に焦点を当てた研究はGaier（2001）、Qing & Gerasi（2012）、Chewning（2000）、Friedmann（2003）が挙げられる。Gaier（2001: 18）は学生同窓会の直接的な効果の測定は困難だが、学生同窓会は「同窓会について学生を教育し、交流するための非常に貴重で生産的な手段」と評価し、卒業生の大学への関与や貢献にも役立つと学生同窓会の役割を強調している。その後もGaier（2005）は、大規模州立大学の1,608名の卒業生を対象に調査を行い、学生時代の経験に対する満足度が高いほど、卒業生は大学に貢献や参加する可能性が高いことを示した。そしてこの調査の分析から若手卒業生は寄付よりも大学の活動に参加する可能性が高いことを指摘している。Qing & Gerasi（2012）は、米国における学生同窓会の全体像（目的・プログラム・会費等）を調査し、学生同窓会が毎年15ドルから25ドルの会費を加入する学生から徴収していることや、一部の学生同窓会では学部生・大学院生に給与を支払って学生同窓会の運営に関して支援やアドバイスを得ていることを明らかにした。Chewning（2000）は、学生同窓会や学生財団に所属していた学生は、大学のミッションについて深い理解と大学への支援の必要性に関する知識を多く持っているとして論じている。このような学生同窓会の効果について、Friedmann（2003）は学生同窓会のメンバーであった経験の有無と寄付率を分析し、学生同窓会のメンバーとして大学の活動に関与していた経験を持つ卒業生の方がそうでない卒業生よりも寄付率が高いことを示した。

一方、日本の大学における学生と卒業生との繋がりの機会に目を向けてみれば、OB・OG訪問や寄付、大学や同窓会が企画したイベントへの参加といった形で機会が限定的であり、卒業生個人が直接学生と関わる機会は非常に少ない。日本の大学が従来から米国の大学同窓会の運営方法や大学と卒業生との関係構築を参考にしているものの、学生と卒業生との関わり方については議論がなされていない。先行研究では、大学と卒業生との関係構築には学生の関与が必要と指摘され、多くの米国の大学で学生同窓会が設立され実践されてきたが、学生同窓会に関する実証的研究は多くない。加えて、複数の大学・国家における学生同窓会を俯瞰しつつ、学生同窓会のあり方に言及した先行研究は管見の限り見られない。

そこで本稿では、萌芽段階にある日本の学生同窓会と、長い歴史を持つ米国の学生同窓会の論理構造を比較分析することによって、その意義を明らかにし、日本における大学と卒業生との関係構築に示唆を得ることを目指したい。40年以上続いてきた米国の学生同窓会の構造と意義を明

らかにすることは、「大学と卒業生とが生涯にわたって支え合う関係を在学中からどのように機能的に築くか」という課題を考察するための重要な示唆が多く含まれていると考える。より具体的には、次の2つの課題を明らかにすることを本稿の目的とし、併せて課題に関する日米の共通点及び相違点も考察する。

- ①日米の学生同窓会はどのような論理構造で成り立っているのか。
- ②日米の大学における学生同窓会の意義は何か。

1.4. 分析の枠組み

上記の課題を検証するため、本稿ではロジックモデルの枠組みを用いて、日米の学生同窓会の論理構造を検証し、その上で大学における学生同窓会の意義を考察する。

ロジックモデルとは、事業を投入資源・活動内容・活動結果・直接的成果・間接的成果という5つの項目に分解する。W. K. Kellogg Foundation (2003) は、ロジックモデルの5つの項目を以下のように説明している。投入資源とは学生同窓会の運営に必要な資源を意味する。それらの資源を獲得し、投入することによって計画した活動を遂行することが可能となる（活動内容）。活動が実施されれば、期待したサービスの提供が可能になる（活動結果）。そうした活動の実施によって参加者は何らかの恩恵を得ることができる（直接的成果）。最終的に参加者が恩恵を得られれば、組織やコミュニティに何らかの変化が起こることが予想される（間接的成果）。

ロジックモデルを適用する理由は、プログラムの資源と活動が理想とする成果にどのように繋がっていくのかを詳細に示すためである（W. K. Kellogg Foundation, 2003）。ロジックモデルのプロセスを示すことによって適切な評価と有益な情報をもたらすことが可能となる（小湊, 2016: 8）。本稿では、こうしたロジックモデルを用いて、学生同窓会の全体構造を描くこととする。

1.5. 調査概要

調査対象は、米国のオハイオ州立大学学生校友協議会、匿名の大規模州立大学（以下「A 大学」）の学生同窓会、ノースイースタン大学学生同窓会、日本は立命館アジア太平洋大学（以下「APU」）の校友会学生実行委員会である（表1）¹。

APUを選んだ理由として、日本ではまだ学生同窓会は普及していない中でAPUの校友会学生実行委員会は、活動の歴史も15年と長く、APU校友会と密に連携し活発に活動している日本でも先進的な事例である。

表1 調査対象大学及び学生同窓会

大学名	大学の設置形態	学生同窓会名
オハイオ州立大学	公立	学生校友協議会 (Student-Alumni Council)
A 大学	公立	学生同窓会※
ノースイースタン大学	私立	ノースイースタン大学学生同窓会 (The Northeastern University Student Alumni Association)
立命館アジア太平洋大学	私立	校友会学生実行委員会 (Loop. A. S.)

出典：インタビュー調査より筆者作成。

注：A 大学は匿名の為、学生同窓会名も匿名にしている。

米国の調査対象である3大学は、いずれも約20,000名以上の大規模大学であり、学生数5,818名のAPUと対照的であるが、大多数の学生・卒業生へのアプローチを分析するうえで参考になるだろう。

オハイオ州立大学の学生校友協議会は、1980年以来、学生の経験を強化するために活動している歴史ある学生団体であり、その長い活動実績から示唆を得られるものは大きいと考え採用した。A大学は同窓会組織が大学とは別組織で独立しており、A大学の卒業生との関係構築に関する業務を全て請け負っている。そうした形で展開される学生同窓会の様子を見ることができる。ノースイースタン大学学生同窓会はCASEの学生発展プログラムにおける優れた学生同窓会として2010年から2017年まで毎年表彰され、高い評価を受けており、全米でも先進的な事例である。

調査は2017年5月・6月・8月にAPU校友会会長、APU校友課、校友会実行委員会の学生、米国の大学校友課の職員・同窓会職員を対象に半構造化インタビューの手法を用いて実施した。インタビューは、調査協力者の同意を得たうえでICレコーダーを用いて録音した。大学における学生同窓会の論理構造と意義を検証するために、調査対象大学・同窓会に対するインタビュー調査結果と共に、調査対象大学の戦略に関する資料、大学・同窓会から提供された資料をインタビューを補足するための二次資料として用いる。

以下、第2節では日本の大学における学生同窓会の調査結果、第3節では米国の大学における学生同窓会の調査結果をロジックモデルの枠組みを用いて検証する。以上を踏まえ、終節では日米の学生同窓会の比較と共に大学と卒業生との関係構築における学生同窓会の意義を考察する。

2. 日本の大学における学生同窓会の論理構造

2.1. 日本の大学における学生同窓会

はじめに、日本で最も歴史の長い学生同窓会として APU の校友会学生実行委員会の事例を、ロジックモデルの投入資源・活動内容・活動結果・直接的成果・間接的成果という5つの項目に照らしながら観察する。まず APU 校友会は、APU の早期卒業プログラムにより第一期生が卒業した 2003 年に設立された。現在卒業生総数は 15,096 名であり、卒業生の出身国・地域数は 127 にものぼる。同大学の学生総数 5,818 名のうち、国際学生²が 2,947 名と約半数を占めており、学部講義の 90%は日英二言語で開講するといった国際色豊かな大学であるため、卒業生の出身国が多様である。APU 校友会は、国内に 7 支部、国外に 22 の支部を持つ。APU 校友会の特徴としては、大学が 2000 年に開学しているため、卒業生は 20 代 30 代の若手卒業生を中心としている。校友会学生実行委員会は、校友会の傘下組織として 2003 年の APU 校友会設立と同時に設立された。校友会学生実行委員会が設立された意図としては、「校友会と大学とのリレーションを大学だけが行ってしまうと、卒業生と学生の間に距離が生まれると考えた」からだと言及する APU 校友会会長は語る。また「校友会学生実行委員会」という名称を、学生や卒業生が愛着を持てるようにするため、表現を柔らかくして現在は、「Loop. A. S. (ループス)」と変更して活動している。「Loop. A. S.」とは、卒業生と学生を繋げること (Loop Alumni and Student) を意味している。

2.2. 校友会学生実行委員会の論理構造

(1) 投入資源

校友会学生実行委員会に所属している学生は 38 名で、主に 1 年生・2 年生で構成されている。彼らの運営支援を 3 年生や 4 年生、APU 校友会、校友課が行っているが、主要メンバーを 4 年生まで拡大するという検討も現在行われている。年に約 15 名を目途に新しいメンバーを入れており、それに対して 2017 年には約 80 名の応募があった。校友会学生実行委員会には APU 校友会から年間 80 万円程度の予算と必要に応じてそれを超える分の資金補助を提供している。APU 校友会会長によれば「より広い視点で企画を考えられるようサポート」するため、校友会役員から校友会学生実行委員会の担当をつけており、Skype を通じてミーティングに参加し、コミュニケーションを取るようになっている。しかし、校友会の役員の多くは大学の所在地である別府市以外に勤務しているため、校友会学生実行委員会に対する日常的なサポートやアドバイスは APU 校友会事務局を担当する校友課が担っている。大学と学生同窓会との関わり

方は、週 1 回行われる学生同窓会のミーティングの議事録を用いて、校友課と校友会学生実行委員会で振り返りと今後の活動の確認が行われる。大学が考える校友会学生実行委員会と他の学生団体との違いは、卒業生が後盾としてついていることだと大学担当者は語る。学生が卒業生にコンタクトを取る方法は、① SNS を利用して連絡をする、②卒業生データベースを見てメールする、③校友会事務局もしくは APU 校友会の役員に相談して繋いでもらうという 3 つの方法がある。

(2) 活動内容

校友会学生実行委員会の活動内容は主に次の 4 つである。① APU 校友会や大学が学内でイベントをする際にスタッフ（受付・会場設営・司会等）として手伝う。②要請があれば、校友会の海外支部のイベントに参加する（費用負担：校友会）。③学生と卒業生が交流する企画を実施する。④校友会学生実行委員会の学生を対象としたイベントも行う。例えば、校友会実行委員会の学生のみを対象とした企画として AP ハウスという大学の寮を利用した 1 泊 2 日の合宿で、企業の人事を担当する卒業生と校友会学生実行委員会の学生との交流を行うというものである。

(3) 活動結果

校友会学生実行委員会の活動によって、学生は多様な卒業生と出会うことができる。また、入学式に校友会実行委員会が校友会及び同会の紹介をすることで、新入生に校友会と校友会実行委員会の存在を認識してもらうことができる。校友会実行委員会の学生達は、「グローバルファミリーという APU 校友会のコンセプトがあり、校友会の存在を知らないことにはそのビジョンは達成できないと思うから学生に校友会という組織を知ってほしい」といった意見や大学役員が「『卒業しても APU 生』と言っていて、私もそうでありたい」という発言があり、学生に校友会や大学の想いが伝わっていることが確実に窺える。こうした学生同窓会は、「校友会の認知度の向上に非常に貢献してくれている」と APU 校友会会長は高く評価している。また、他の学生団体よりも「校友会実行委員会の学生がやりたいことを校友会の予算や大学のリソースを使って実行しやすい」と APU 校友会会長は説明し、学生も「自分たちで試行錯誤してやっていかなければならないので、他の団体よりも成長できるのではないか」と実感している。

(4) 直接的成果

APU の卒業生は、世界各国で働いており、そうした卒業生と学生が話すことで視野が広がると APU 校友会会長はいう。また、校友会学生実行委員会の学生も校友会学生実行委員会に所属するメリットを次のように語る。

「APU はまだ本当に小さい若い大学で、卒業生が1万人ちょっとしか出ていないので、本当に少しでも多くの人と関わっておくことで、社会に出た時に助けてもらえるかなというのはある。」

別の校友会学生実行委員会の学生は、卒業生はすでにAPUでの4年間を経験していて、何でも聞くことができる身近な存在であり、話していても話題が尽きないという。卒業生と交流することで、学生が今後の学生生活をどのように過ごしていくべきかを学ぶことができると語る。彼ら自身も校友会学生実行委員会の活動を通して、リーダーであることの難しさや人と関わることの大切さを学んで成長を感じている。特に校友会実行委員会は卒業生と共に活動する団体であるため、「ビジネスの一環として」、社会に出た際の言葉の使い方や立ち振る舞いを学べるという意見も学生から見られた。校友会学生実行委員会を得たネットワークでインターンシップ先を得た学生もいる。

(5) 間接的成果

校友会実行委員会の学生達は、卒業後も大学に戻って講義や学生にアドバイスをしたり、各国の校友会支部の活動が必要があれば支援したいと口々に語る。

大学にとって校友会学生実行委員会は次の2つの間接的成果があるという。第一は、卒業生と大学との繋がりの再構築である。卒業生は、学生から連絡が来たり依頼があれば快く引き受けてくれるため、校友会学生実行委員会が、卒業生にアポイントを取って学生のためのイベントを行うことで、大学側が把握していなかった卒業生が来てくれるという。第二は、学生が主体的に自らのキャリアや大学での学びを考えることである。校友会学生実行委員会は1年生、2年生が中心となっているため、これからの大学での学びをどうするか、自分のやりたい仕事をみつけられるかというキャリアの道筋を作るイベントを企画している。学生にとって卒業生は、普段聞けない「企業の本音の部分まで何でも質問できる存在であり、卒業生にとっても学生から様々な意見や質問が飛び交うことで卒業生自身も刺激を受けて帰っていく」といった形でシナジー効果が生まれているという。校友会学生実行委員会が学生に対して卒業生との交流の企画を展開するメリットを大学担当者は次のように語る。

「本当に校友会学生実行委員会がいるからこそ卒業生の存在を知ることができるという在学生はたくさんいると思う。就職するにあたってとても不安を抱える学生はいて、それを支える教職員はいるが、教職員以外にも支えてくれる卒業生がいるということを知ると意味は大きい。」

特に同大学では卒業後、日本に残る国際学生の比率が高く、就職の際には日本の文化や日本の企業の話卒業生に聞くことが主流になっているという。

校友会学生実行委員会の課題としては、次の2点が挙げられた。第一は、学内外における認知度である。校友会実行委員会の学生は「卒業生で校友会実行委員会を知らない人達にもアピールして、校友会や卒業生の人達から校友会実行委員会を使ってもらえるようにになりたい」と期待している。第二は、大学が必要とする支援の明確化である。APU校友会や校友会実行委員会からは、学生と卒業生との繋がりを構築し、母校の発展に寄与していくうえでは、大学側から大学が必要とする支援を明確にしてもらい、それに貢献していく方が活動しやすいという意見も複数見られた。

3. 米国の大学における学生同窓会の論理構造

本節では、米国の3大学における学生同窓会を事例に、その投入資源・活動内容・活動結果・直接的成果・間接的成果の順に観察したい。

3.1. 投入資源

(1) オハイオ州立大学学生校友協議会

オハイオ州立大学の学生校友協議会は、37年間の歴史を持つキャンパス内でも有名な学生団体であり、約100名の学生が関わっている。毎年180名から200名の加入応募者がいるが、小規模の組織として運営しやすいように35人を選出する。役員は、会長・5名の副会長・各プログラムを調整するディレクターによって構成される。大学からは資金援助に加えて、学生校友協議会のアドバイザーが置かれていて、「学生校友協議会はアドバイザーから多くの知識を得られるので（様々な企画が）成功することが多いと考えている」と同大学担当者はそれを評価している。

(2) A大学学生同窓会

A大学学生同窓会は、年会費と同窓会からの資金援助で運営されている。学生は99ドルの会費を払うことでメンバーシップの利益が受けられる。現在は約7,500名の学生が会費を支払っている。学生同窓会は、同窓会職員2名と共に活動の企画や実施を行う。

(3) ノースイースタン大学学生同窓会

ノースイースタン大学学生同窓会は、約70名の学生が参加している。同大学の特徴でもあるコーオペ教育に参加している学生はその期間中、活動ができないため、毎月のグループミーティングでは35名から45名のメンバーが参加している。大学は学生同窓会に対する予算を提供しており、その額は「なかなか多い」という。学生同窓会が卒業生

との連絡先や交流を校友課に求めた場合は、校友課はその手助けをするなど密なコミュニケーションを取っている。また、「誰が学生同窓会に入っていたのか」を学生データに記録するため、学生同窓会のメンバーリストを校友課に提出するよう求めている。

3.2. 活動内容

(1) オハイオ州立大学学生校友協議会

学生校友協議会は、①卒業生に対する活動、②学生に対する活動、③キャンパスイベントの3つの領域について活動を行っている。「これらのプログラムは、学生と学生、学生と卒業生の関係を強化するように設計」されており、同協議会は「他の団体やオハイオ州立大学同窓会が主催するキャンパスイベントの専用ボランティアとしても活躍」している。その多様な活動の例を挙げれば、ホームカミングデーを、学生・卒業生・地域住民といった全てのステークホルダーが参加可能な形で開催している。ホームカミングデーを大学のフットボールの試合の激励会として位置づけて開催し、フットボールの試合前には、「みんなでがんばろう」というペップラリー（決起集会）をメインイベントにして開催する³。学生校友協議会の活動資金を集め、大学スポーツを盛り上げるために、フットボールの良い席のシーズンチケットが当たるくじを販売している。卒業式の週には数多くのプログラムを提供し、大学と同窓会と共に卒業生を祝う企画を行う。

(2) A 大学学生同窓会

学生と卒業生とのネットワーキングディナーやキャリアフェアを行っている。キャリアフェアでは卒業生が、学生に対して履歴書の書き方や就職活動のアドバイスを行う。

(3) ノースイースタン大学学生同窓会

ノースイースタン大学学生同窓会は、卒業生・学生に対する活動とコミュニティサービスの2つの領域について活動を行っている。卒業生・学生に対する活動は、ホームカミングデーのイベントを企画実行する委員会に学生同窓会のメンバーも参加している。学生の興味をひくようなアーティストを毎年キャンパスに呼ぶよう努めている。一週間にもわたるホームカミングデーの期間には、大学のスクールカラーのタオルを配布して、ホッケーチームやバスケットボールチームを大学のマスコットと応援するイベントも行われる。コミュニティサービスに関する活動は、毎年10月から12月にかけて、学生同窓会が学生・教職員・卒業生等から寄付と新しいテディベアを集めている。このイベントは「ハスキーハグ」と呼ばれ、テディベアはボストンの病院、ホームレスの避難所及び地元の児童養護施設の子供たちに配布される。第二は、ケンブリッジのYWCAと協力して、毎年12月にシン

グルマザーとその子供たちのために休日パーティーを開催する。母親と子供の両方に贈り物や夕食、ゲームを提供する。

3.3. 活動結果

(1) オハイオ州立大学学生校友協議会

年間約45のプログラムやイベントを実施しており、学生と卒業生とのディナーイベントといった活動を通して、活動資金を得ている。また、1年生3名と上級生2名の学生に対して、教室内外で卓越したリーダーシップを発揮した学生に学生校友協議会奨学金を授与する。

(2) A 大学学生同窓会

ネットワーキングディナーやキャリアフェアといった活動を通して、卒業生が大学に戻ってくる。それらのイベントでは、学生が履歴書の書き方や服装のアドバイスなどを卒業生から得ることができる。

(3) ノースイースタン大学学生同窓会

2017年は、1週間のホームカミングデーを開催し、イギリスの著名な司会者を招いた晚餐会を開催した（学部生は15ドル、教職員は25ドル、卒業生は35ドルの参加費が必要⁴）。コミュニティサービスに対する活動として、学生同窓会は地元の子供の慈善団体に配布されるテディベアの購入費を寄付で集めようと目標額750ドルを設定し、寄付活動を開始した。2018年現在800ドルを集め、目標額を達成している。

3.4. 直接的成果

(1) オハイオ州立大学学生校友協議会

学生校友協議会はメンバーを100名とした定員管理を行っているため、「お互いをよく知ることができ、絆もとても深く強い」と学生同士の繋がりも成果の一つになっている。「それが卒業後も関わりを持ち続けてくれる一因になっている」という⁵。また「卒業生はアドバイスや考えていることを学生と共有することがとても好き」であり、卒業生の学生支援に対するニーズを学生同窓会の企画によって満たしている。同協議会の学生の70%以上が、クラブ活動をはじめとする学内の他の組織でリーダー的役割を果たしているため、他の学生団体との連携が取りやすくなっている。学生が学生にアプローチすることにより、「学生が何を欲しているのか、今どういった時期なのかを学生自身がよくわかっているのか、ピンポイントで訴求することができる」と学生に対する効果的なアプローチも成果として挙げられる。

(2) A 大学学生同窓会

同窓会を理解する学生が増えることや、学生と卒業生や卒業生同士のネットワークが形成されること、彼らの能力開発の場となることである。「会費を払っていてもいなくて

も、卒業生は学生を支援するために繋がりたいと考えており、それは非常にポジティブなネットワーク形成であり、能力開発である」という。

(3) ノースイースタン大学学生同窓会

学生同窓会があることで、在学中に「同窓会とはどのようなものなのかを理解してもらうことができる」という。学生や卒業生に対して「大学が様々なプログラムや資源を提供しているということを知ってもらうことが本当に重要である」と同大学の担当者は語る。

3.5. 間接的成果

(1) オハイオ州立大学学生校友協議会

学生同窓会に関わった学生は、「卒業後も様々な分野のリーダーになると予想される。組織の一員であると認識して貢献することに繋がり、大学や同窓会の活動にも積極的に参加」することが期待されている。

(2) A 大学学生同窓会

同大学同窓会のデータによれば、学生同窓会のメンバーだった場合、同窓会会員になる可能性は2倍だという。

(3) ノースイースタン大学学生同窓会

間接的成果の一つ目は、「学生と繋がっていることで、卒業生への移行が容易になる」ことである。「卒業後10年は引越しやローンの返済、キャリアを確立したりしている年代で多くのことが起きており、それを大学が少しでも安定できるように手伝いたい」と同大学では考えられていて、大学と卒業生が「その10年を互いに協力し合えたと称えよう」信頼関係を作り「学生、そして若手卒業生と共に大学は人生を築いていきたい」とされている。二つ目は、大学はモノやサービスを提供しているだけではなく、「大学、同窓会、卒業生がお互いに持っているものを提供しあって、

コミュニティを形成している」ことだと同大学担当者は強調している。

4. 考察

本稿の目的は、日米の学生同窓会の事例を通して、大学と卒業生との関係構築における学生同窓会の論理構造と意義、それらの共通点及び相違点を検討することであった。最後に日米の学生同窓会の論理構造をそれぞれ明確にしたうえで、大学と卒業生との関係構築における学生同窓会の意義を明確にしよう。

まず、ロジックモデルを用いて、日本の学生同窓会の論理構造を検証すると図1のようになる。投入資源は同窓会からの資金援助と学生同窓会に対するアドバイザー的な存在である職員・卒業生、活動する学生である。活動内容はキャリアイベントの実施や同窓会の周知活動である。活動結果は、学生の雇用の機会の獲得、学生と卒業生とのネットワーク形成、同窓会の認知度向上である。直接的成果は、学生の能力開発、卒業生の学生支援に対するニーズへの対応、大学や同窓会に対する学生・卒業生の理解であった。間接的成果は、学生自身による主体的な学びの考察と大学と卒業生との関係の再構築である。

一方で、米国の学生同窓会に関するロジックモデルは図2のようになる。投入資源は大学・同窓会からの資金援助と学生同窓会に対するアドバイザー的な存在である職員、卒業生・学生である。活動内容はキャリアイベント・大学の伝統イベントの実施、大学スポーツの応援、地域貢献及び社会貢献活動である。活動結果としては、日本と同様に学生の雇用の機会の獲得、学生と卒業生とのネットワーク形成に加えて、大学の伝統に対する理解者の獲得、活動資金や奨学金の財源獲得、大学スポーツ観戦者の獲得、ス

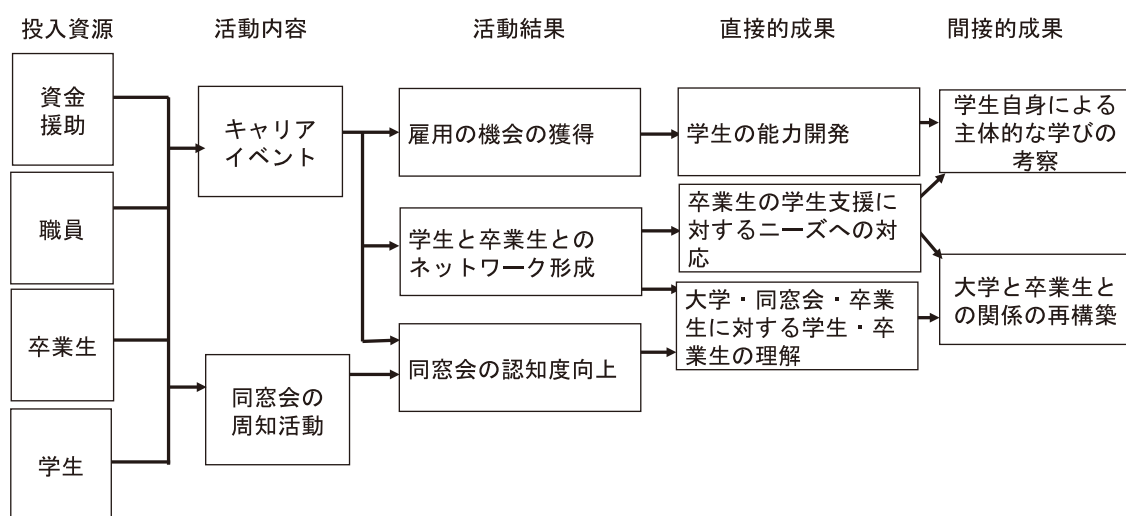


図1 日本の学生同窓会のロジックモデル

出典：筆者作成。

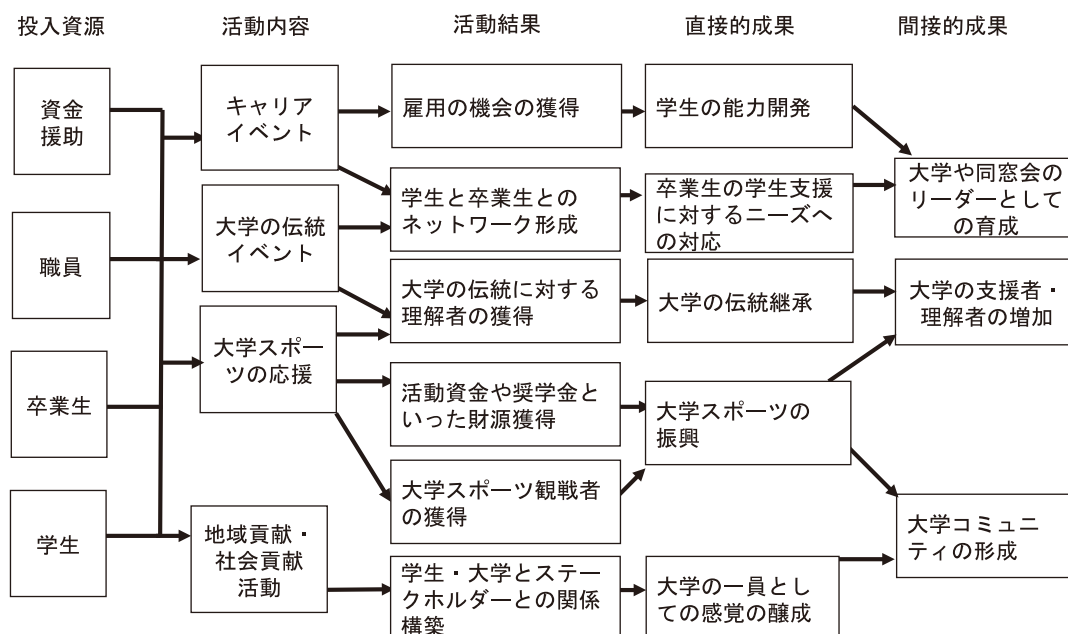


図2 米国の学生同窓会のロジックモデル

出典：筆者作成。

ステークホルダーとの関係構築といった複合的な成果が見られた。直接的成果は、学生の能力開発と卒業生の学生支援に対するニーズへの対応、大学の伝統継承、大学スポーツの振興、大学の一員としての感覚の醸成であった。間接的成果は、学生を将来の大学や同窓会のリーダーとして育成すること、大学の支援者・理解者の増加、長期視点での大学コミュニティの形成であることが大学・同窓会側の認識として明確に示された。

このように、日米の学生同窓会の論理構造を比較すると、活動内容についてはキャリア開発という点で共通点が見られたものの、米国の学生同窓会は大学の伝統やスポーツ、コミュニティサービスと関連した幅広い活動を行っていることが明らかになった。幅広い活動の背景には、大学や同窓会からのアドバイザーと共に企画立案を行い、大学が必要とすることと学生がやりたいことの調整を図っていることがあると言えるだろう。また学生同窓会の間接的成果も、日本は学生の成長や卒業生との関係に焦点が当てられていたが、米国は大学が発展するための活動としてより広い視野で学生同窓会の活動を捉えているように見受けられた。

これらを統合すると、学生同窓会の意義は、次の2点にまとめられる。第一の意義は、大学に対する「学生の関与」から「卒業生の貢献」という連続性を担保する仕組みとしての学生同窓会の存在の大きさである。従来まで日本は米国の大学と卒業生の在り方を一つのモデルとしてきたものの、それらを取巻くアクターの中で学生の存在に光を当ててこなかった。しかし、学生に焦点を当ててみれば、卒業してから大学に関わることを求めるだけではなく、在学

中に大学や卒業生に関わった経験を循環させていく仕組みとして学生同窓会の存在があることが確認できた。

第二の意義は、リーダー育成を通じた大学コミュニティの形成である。学生同窓会は、学生と社会（卒業生）との結節点として、学生・卒業生に新しいネットワークを提供している。そうした過程において、大学がどのような支援を必要としているのか、なぜ大学は繋がりを学生・卒業生に求めるのかといった大学の活動を理解する将来のリーダーを育成している。前述した Chewning (2000)、Friedmann (2003) の先行研究においても、学生同窓会のメンバーの大学に対する理解や貢献を行う確率が高いことが指摘されており、本稿の調査結果は、こうした研究結果を支持するものとなった。

5. おわりに

日本での学生同窓会の展開を考えたとき、米国の学生同窓会から得られた示唆は、次の2点にまとめられる。第一は、大学が学生同窓会を通して実現したいことを明確にし、それを大学と学生同窓会とのコミュニケーションを通して、学生や卒業生に伝達することである。

第二は、学生同窓会の活動と大学の諸活動の有機的結合を図ることである。米国の学生同窓会は学生・卒業生などのステークホルダーを巻き込んで、大学スポーツの振興やコミュニティサービスに関する活動を行っていた。学生同窓会の学生が、他の学生団体にも所属することによって有機的に大学の様々な活動と連携している点は学生同窓会の特徴と言えよう。

米国の学生同窓会は、プログラムレベルからはじまり、学生の努力と卒業生の貢献、そして大学・同窓会の支援によって学生同窓会へと規模を拡大してきた。また学生同窓会のメンバーはその他の学生団体のリーダーやメンバーでもあった。日本がこのような組織の設立を求めるのであれば、新しく学生同窓会を設立するのではなく、まずは既存の学生団体のニーズ把握や彼らとの双方向のコミュニケーションを十分に行うことが重要であろう。

一方で、本稿から得られた日本に学生同窓会を展開する場合に考慮すべき点としては、学生の選定方法とその運営方法が挙げられる。米国の学生同窓会に加入するには、学生の GPA による制限や学生同窓会の規模を適切に保つための定員管理が行われている。米国の学生同窓会としても週に 1 回のミーティングへの参加を義務付けるなど、「レジュメのための学生活動」にならないような工夫がなされている。APU の校友会学生実行委員会の学生からも「就活の団体と思われたくない。卒業生と関わることはそれだけがメリットではない」という意見もあった。学生の自主性や意思を尊重した学生同窓会の定員管理の方法や学生同窓会が形骸化しない運営方法の工夫が大学・同窓会にも求められる。

本稿は、従来まで検討されてこなかった学生同窓会の論理構造と意義について主に大学側の視点から検討し、学生から卒業生への連続性の担保と、将来の大学の後継者・支援者育成といった二つの点において意義があることを示した。多くの米国の大学で設立されている学生同窓会の存在は、日本ではまだ知られていない。しかし、本稿で明らかにしたような学生同窓会の論理構造とその意義に鑑みれば、日本でも大学・同窓会がその戦略をより明確にすることにより、学生と卒業生を繋ぐ一つの仕組みとして学生同窓会が機能する可能性は大きいだろう。今後の課題として、本稿では、学生同窓会の役割に関して、学生や卒業生の立場から分析することはできなかった。これらに関しては別稿を期したい。将来的には、より多くの事例から日本の大学の現状に即した大学と卒業生との関係構築に対する学生関与のモデルを提案したい。

注

¹ インタビュー調査は以下のとおり行った。2017 年 5 月 17 日 APU 校友会長、同年 6 月 27 日・28 日 APU 校友課、校友会学生実行委員会学生 6 名。同年 8 月 1 日、ノースイースタン大学校友課、Signature Program・Young Alumni・Student and Affinity Engagement 担当 Director、Adrianne Dannenberg 氏。同年 8 月 4 日、A 大学同窓会、Student-Alumni Program 担当 Director、X 氏。同年 8 月 7 日、オ

ハイオ州立大学同窓会課、Mentoring and Engagement 担当 Associate Director、Lauren Luffy 氏。

² APU における「国際学生」とは、「在留資格が『留学』である学生」を意味する（立命館アジア太平洋大学、2018）。

³ 一般的に日本での「ホームカミングデー」は、学生・卒業生・地域住民等が参加可能なイベントであることが多いが、大学のスポーツと有機的な紐づけができていない大学はほとんどない。

⁴ News@Northeastern (2017 年 11 月 6 日) (<https://news.northeastern.edu/2017/11/06/its-homecoming-week-heres-everything-you-need-to-know/>) (2018 年 8 月 29 日)。

⁵ 学生校友協議会を経験した学生・卒業生による SAC 同窓会 (SAC Alumni Society) が 2011 年に設立された。

引用文献

- Astin, A. W. (1999). Student involvement: A Developmental theory for higher education. *Journal of College Student Development*, 40(5), 518–529.
- Button, R. A. (2010). How to build the bridge between Students and alumni. In Feudo, J. A. (Ed.), *Alumni relations: A newcomer's guide to success*, 2nd edn. (pp. 123–129). Washington, D.C.: Council for Advancement and Support of Education.
- Chewning, P. C. (2000). Student Advancement Programs. In Buchanan, P. M. (Ed.), *Handbook of Institutional Advancement*, 3rd edn. (pp. 255–258). Washington, D.C.: Council for Advancement and Support of Education.
- Ebert, K., Axelsson, L., & Harbor, J. (2015). Opportunities and challenges for building alumni networks in Sweden: A case study of Stockholm University. *Journal of Higher Education Policy and Management*, 37(2), 252–262.
- Friedmann, A. S. (2003). *Building communities of participation through student advancement programs: A first step toward relationship fund raising*. Dissertation, The College of William and Mary.
- Gaier, S. E. (2001). Increasing Alumni Involvement and Alumni Financial Support through a Student Alumni Association. *Clearinghouse on Higher Education*, 1–22.
- Gaier, S. E. (2005). Alumni satisfaction with their undergraduate academic experience and the impact on alumni giving and participation. *International Journal of Education Advancement*, 5(4), 279–288.
- Gallo, M. (2012). Beyond philanthropy: Recognising the

- value of alumni to benefit higher education institutions. *Tertiary Education and Management*, 18(1), 41–55.
- Gallo, M. (2013). Higher education over a lifespan: a gown to grave assessment of a lifelong relationship between universities and their graduates. *Studies in Higher Education*, 38(8), 1150–1161.
- 原 裕美 (2017). 「米国の大学と同窓会における学生と卒業生を繋ぐ仕組み—Student Alumni Association の役割—」日本女性学会大会, 2017 年 6 月 18 日, 中京大学.
- Indiana University Student Alumni Association. (n.d.) 基本データ (<https://www.facebook.com/pg/IUStudentAlumniAssociation/about/>) (2018 年 8 月 29 日)
- 小湊卓夫 (2016). 「評価からロジックモデル (指標) へ」大学評価担当者集会全大会発表資料, 2016 年 8 月 25 日, 於立命館大学.
- Kuk, L., Thomas, D., & Banning, J. (2008). Student organizations and their relationship to the institution: A dynamic framework. *Journal of Student Affairs*, 17, 9–20.
- Ohio University Student-Alumni Council, (n.d.). “What we do” (<https://www.osu.edu/alumni/communities/sac/what-we-do/>) (2018 年 8 月 23 日)
- Qing, L., & Gerasi, L. (2012). *The programming and Structure of student alumni associations*, Educational Advisory Board: Washington, D.C.
- Rattanamethawong, N., Sinthupinyo, S., & Chandrachai, A. (2018). An innovation model of alumni relationship management: Alumni segmentation analysis. *Kasetsart Journal of Social Sciences*, 39(1), 150–160.
- 立命館アジア太平洋大学 (2018). 「国・地域別学生数」 (<http://www.apu.ac.jp/home/about/content57/>) (2018 年 8 月 23 日)
- Rust, A. B. (2012). Challenges of alumni associations at universities: Income from alumni (donations and bequests) at South African universities. *African Journal of Business Management*, 6(45), 11273–11280.
- Shakil, A. F., & Faizi, W. U. N. (2012). The importance of alumni association at university level in Karachi. *Pakistan Education*, 2(1), 25–30.
- Sung, M., & Yang, S. U. (2009). Student–university relationships and reputation: a study of the links between key factors fostering students’ supportive behavioral intentions towards their university. *Higher Education*, 57(6), 787–811.
- Tinto, V. (1975). Dropout from higher education: A theoretical synthesis of recent research. *Review of Educational Research*, 45(1), 89–125.
- W. K. Kellogg Foundation (農林水産政策情報センター訳) (2003). 『ロジックモデル策定ガイド』財団法人農林水産奨励会.
- Zhimin, L., Chunlian, C., & Xian, W. (2016). Alumni Relations in Chinese HEIs: Case Studies of Three Major Universities. *Frontiers of Education in China*, 11(1), 74–101.

Significance of Student Alumni Associations for Building Relationships between Universities and their Students: Comparing Student Alumni Associations in Japan and the United States

Hiromi Hara

(Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University)

The purpose of this paper was to find the significance of student alumni associations for alumni relations by comparing and examining the logical structure of Japanese and the U.S. student alumni associations.

We explored two research questions: 1) What kind of logical structure does the student alumni association consist of? 2) What is the significance of student alumni associations for alumni relations?

As a result, we found that the U.S. universities clearly recognized that student alumni associations foster future university members or alumni association leaders.

Our findings regarding the significance of student alumni associations were as follows: (1) to ensure the continuity of “student involvement” and “alumni’s contribution”, and (2) to form a university community through leadership development. The student alumni associations provided a new network for students and alumni as a point of connection with students and society. In that process, universities train future leaders who understand university activities, such as what kind of support the university needs and why it is necessary to connect with the university.

The most important implication for the future of Japanese alumni relations is to clarify what universities need to realize through student alumni associations and communicate effectively with their students and alumni through their student alumni associations. Moreover, the U.S. student alumni associations involve students, alumni and other stakeholders and promote university sports and community services.

Student alumni associations need to establish an organic link between their activities and the university’s activities.

Keywords: Student alumni association, Alumni, University community, Networking, Leadership development